

# 日本語教科書における「会話」とは何か

## ある「本文会話」批判

川口 義一\*

キーワード：会話，文型・文法教育，文脈化，会話文の精緻化，

### 0. はじめに

本論は、ある日本語教科書の中で「会話」の形式で提示されているものが、実際は会話としてきわめて不自然であること、およびその不自然さは文型・文法教育の立場からしても容認できるものではないことを、その教科書の本文会話を分析材料にして証明するものである。会話の不自然さについては、会話教育に関する高木（近刊）の理論を用い、また文型・文法教育に関する議論では、筆者の最近の論文で展開している「文脈化」「(指導用) 会話文の精緻化」という概念を用いることとする。

本論の分析対象は1冊の教科書であるが、一般に日本語教科書所載の「会話文」にこの教科書と同様の問題が見られることも少なくなく、本論の分析の枠組は、教科書分析一般のための枠組としても利用できるものと思われる。

### 1. 不自然な「会話」

本論末に、『日本語で学ぶ日本語 初級』（1995 初版・大修館書店）という日本語初級教科書第14課「交差点に止まれ書いてあります」の本文会話（同書 pp.134-135）のコピーを（図1）として引用した。この会話は、一見なんでもない会話のようであるが、読み通してみると、少なくとも次のような疑問が生じてくる。

---

\* 早稲田大学大学院日本語教育研究科

- 1) 山川と田中と山中（山川の誤植か）は、この会話の舞台となっている学校の教師なのか。だとすれば、なぜ山川は「午前の授業は終わりましたか」などという、授業時間を知らないような発言をするのか。
- 2) 田中は、なぜ山川の、授業が終わったかどうかに関する質問には答えないで、残っている学生の話をはじめたのか。
- 3) 山川の「教室の窓は閉めてありましたか」というのは、林とウィンがいる教室（あるいは、林とウィンは別々に異なる教室にいるのか）について聞いているのか。それは、同じ山川の発言の雨と風についての言及から、「窓が開いていたら、雨が吹き込まないように閉めなければならない」という含意なのか。だとすれば、田中の「窓は開いていました」に続いて、山川の「では、閉めに行きましょう／行ってください」などの発話が続くはずだが、田中はなぜその反応を待たずに「ほかの教室も行って見てきます」と言っているのか。あるいは、なぜ自分から進んで「私が閉めてきます」と言わないのか。
- 4) 山中（山川の誤植か）が「私も行きましょう」と発言したあとで教室のカレンダーに言及するのはなぜか。特に、意図のないものだととしても、「きれいですね」と同意を求めているようなこの発言に、田中が何の反応もしないのはなぜか。
- 5) 劉が交差点の「止まれ」という表示に言及するのはなぜか。雨に濡れた町の美しさを話題にしていると思われる発話展開に、なぜ交通のための表示が登場するのか。
- 6) 王の自転車事故の描写に対する山川の、「木の葉の色はきれいですが、道路は雨にぬれて危険です」という反応は何のためか。雨の道路が危険なことをだれに知らせたいのか。危険を警告する前に「木の葉の色の美しさ」について言及することにどういう意味があるのか。
- 7) 田中の「雨の日の車道」についての言及、特に「自転車は安全な歩道を走ってください」というのは、だれのための交通安全指導か。また、雨の日の車道が危険なのは、山川の言うとおり、路面が濡れているためなのか。それなら、歩道も「安全」と言い切れるのか。
- 8) 田中の交通安全の話のあとで、山川が「窓は閉めておきましょう」と言っているところから、劉と王のいる教室は窓が開いていたものと思われる。雨が吹き込まないよう教室の窓を点検しに来ているはずの田中と山川は、なぜこの時点まで窓を閉めないままだったのか。
- 9) 劉は「かさがないからもうすこし待ってみます」と言っているが、「そろそろ午後の授業が始まる時間なのに、なぜ教室を出ないのか。また、この劉の発言を聞いて山川も田中も劉たちを下校を促さないのはなぜなのか。

このように、この会話文は、通常の談話としては不自然な部分が多いのだが、この不自然さはどのようにして生まれるものなのか。この点について、第3節で詳細に検討する。では、このような会話が日本語初級教科書の本文として掲載されていることの意味は何なのか。次節では、その理由を文型・文法教育の視点から検討する。

## 2. 「会話」と文型・文法指導

従来の日本語教科書では、各課の本文は、その課で扱う文型や文法事項を、短文や談話の中に配し、その意味・用法を認識させるための、表現の実例提示の場であることが多かった。この教科書でも、巻末の「各課の学習方法」に、14 課の学習項目が以下のように載っている。(同書 pp.253-254)

### 【学習内容】 天候に関する会話

- 主要文型 主語 は 客語 に 動詞 ⇒ 道路が雨にぬれています  
主語 は 客語 に 補語 と 動詞 ⇒ 交差点に止まれと書いてあります
- 語法 て形の特別用法(てある て行く ておく てしまう てみる)  
原因・理由を表す「て」と「から」
- 連結語 が(文の反意接続) から(理由・原因)
- 留意語句 ない だいぶ 急に なかなか もうすこし
- 間投詞 あ(意外) ああ(感嘆)

これらの学習項目が本文のどこに入っているかを検討してみると、次のようになる。

(当該箇所のあるは、発話している登場人物の発話順の番号で示す。たとえば、(山川 1)なら、登場人物「山川」の最初の発話の中ということになる)

- 主要文型 主語 は 客語 に 動詞 ⇒ 道路が雨にぬれています
- ◇ 並木の緑が雨にぬれて光っています。(劉 1)
- ◇ 道路は雨にぬれて危険です。(山川 3)
- 主語 は 客語 に 補語 と 動詞 ⇒ 交差点に止まれと書いてあります
- ◇ 交差点に「止まれ」と書いてありますね。(劉 1)
- 語法 て形の特別用法( てある て行く ておく てしまう てみる )
- てある
- ◇ 教室の窓は閉めてありましたか。(山川 2)
- ◇ すてきなカレンダーが壁にはってありますね。(山中 1)
- ◇ 交差点に「止まれ」と書いてありますね。(劉 1)
- て行く
- ◇ 車がたくさん走って行きます。(劉 1)
- ておく
- ◇ 窓は閉めておきましょう(山川 4)

てしまう

◇ 自転車の人が転んでしまいました。(王 2)

てみる

◇ もうすこし待ってみます。(劉 2)

語法 原因・理由を表す「て」と「から」

原因・理由を表す「て」

◇ 並木の緑が雨にぬれて光っています。(劉 1)

◇ 道路は雨にぬれて危険です。(山川 3)

原因・理由を表す「から」

◇ かさがないからもうすこし待ってみます。(劉 2)

連結語 が(文の反意接続) から(理由・原因)

が(文の反意接続)

◇ そろそろ午後の授業が始まりますが、午前の学生が…残っています。(田中 1)

◇ 風も強くなってきましたが、教室の窓は閉めてありましたか。(山川 2)

◇ 木の葉の色はきれいですが、道路は雨にぬれて危険です。(山川 3)

から(理由・原因)

◇ かさがないからもうすこし待ってみます。(劉 2)

留意語句 ない だいふ 急に なかなか もうすこし

ない

◇ かさがないからもうすこし待ってみます。(劉 2)

だいふ

◇ 午前の学生がまだだいふ残っています。(田中 1)

急に

◇ 急に雨が降ってきましたからね。(山川 2)

なかなか

◇ 雨はなかなかやみませんね。(山川 4)

もうすこし

◇ もうすこし待ってみます。(劉 2)

間投詞 あ(意外) ああ(感嘆)1)

あ(意外)

◇ あ、あぶない(王 2)

ああ(感嘆)

◇ ああ、劉さん、王さん、まだ勉強していましたか。(山中 1)

このように、本課で設定された学習項目はすべて本文会話に入っている。では、そのことをもって、この会話文を優れた文法教材と呼べるであろうか。もし、そうでないとしたら、学習項目はどのように扱われるべきなのだろうか。また、もしそうでないとしても本文が会話の形態であれば会話教材としては利用できるのだろうか。それぞれの問題については第4節と第5節で、さらに、教科書の本文が会話文であることの意味はどのようにかんがえればよいかについては、次の第3節で議論する。

### 3. 「会話」の成立条件と本文会話

第1節で、問題の本文会話は、会話としていささか不自然なところが多いと指摘した。その不自然さは、第1節で見たような会話の内容や展開に関する疑問が生まれることからもうなずけるが、では、「会話」そのものの構造としてどこに問題があるのだろうか。この問題を考察するために、高木（近刊）の理論的枠組みを利用する。

同論文は、語用論から社会学にいたる広範な先行研究の分析から、「会話」とは何かを再検討した、優れた論説であるが、それによると、「会話」という表現形態は「ある場において、ある動機を持つ複数の参加者同士の相互行為によって組織化される行為」（前掲論文：8）として捉えられ、さらにその行為は次の四つの条件が揃ったときに成立するとした。（前掲論文：8）

- 1) 「ある場（空間的）で」
- 2) 「ある動機（意図）を持った」
- 3) 「二人以上の人間が」
- 4) 「相互行為（やりとり）に参加する」

そこで、問題の「本文会話」について、この四つの成立条件が満たされているかどうか検討してみよう。まず、「ある場（空間的）で」の部分は、「午後の授業開始直前の日本語学校」であるように読めるが、あまりはっきりはしない。「二人以上の人間が」の部分は「人間関係」と読み替えてみると、一見、教師同士（田中・山川・山中）および教師と学生（劉・王）の会話のように見えるが、これも確証の持てるようなヒントが見出せない。第1節でも指摘したが、山川と田中と山中がこの学校の教師なのだとすれば、なぜ山川は「午前の授業は終わりましたか」などという、担当教員ならだれでも知っているようなことを質問しなければいけないのか、劉と王がこの学校の学生だとすれば、なぜからは午後の授業が始まろうとしている時間にまだ教室にいるのかなど、この「二人以上の人物」がどういう立場の人たちなのかが不明である。

しかし、もっと、問題になるのはこの登場人物が「ある動機（意図）を持った」人々なのかどうか、ということである。全体の流れを見る限り、田中・山川・山中が学校内を見て回るのは、雨風の吹き込みが心配される教室の窓の開閉状態と午前中の学生が下校したかどうかの確認のようである。しかし、これもすでに第1節で指摘したように、そうであるには合目的でない会話文が多すぎる。もし、「窓の開閉と学生の下校」の確認を動機に持った会話ならば、例えば、会話の出だしの部分は次のような展開になるはずである。こちらのほうがより自然な会話であるとすれば、元の本文会話の不自然さは、やはり会話にかかわる人物の「動機（意図）」が一貫していないためであると言えよう。

山川：田中先生、ちょっといいですか。

田中：あ、はい。

山川：さっきから急に雨が降ってきたり、風邪が強くなってきたりしているんで、教室の窓を閉めてこなければと思っているんですが、教室の見回りを手伝っていただけませんか。もうすぐ午後の授業が始まる時間なんで、雨が吹き込むといけませんからね。

田中：あ、はい、分かりました。行きましょう。

山川：あ、それから、ついでに、午前の学生たちにそろそろ帰るように言っておこうと思うんですが、まだ教室に残っている学生がいるでしょうか。

田中：あ、はい、まだ何人か残っていましたね。さっき、205 教室をのぞいたら、林さんが雑誌かなにかを読んでいましたし、ウィンさんもまだべんとうを食べていました。

山川：そうですか。じゃ、2 階の窓と学生のチェックをお願いします。私は、3 階を見てきます。

(3 階の教室に行く) ああ、劉さん、王さん、まだ勉強しているんですか。午後の授業が始まりますから、早く帰ってください。

……

最後の「相互行為（やりとり）に参加する」という条件だが、この本文会話は会話の形になっていながら、登場人物がやりとりに参加していない部分がある。第1節で「不自然な」箇所として指摘したところから、登場人物が会話のやりとりに関わっていないために不自然さを感じる部分を、さらに問題になるところに下線を施して、以下にもう一度抜き出してみる。

- 2) 田中は、なぜ山川の、授業が終わったかどうかに関する質問には答えなくて、残っている学生の話が始めたのか。
- 3) 山川の「教室の窓は閉めてありましたか」というのは（中略）「窓が開いていたら、雨が吹き込まないように閉めなければならぬ」という含意なのか。だとすれば、田中の「窓は開いていました」に続いて、山川の「では、閉めに行きましょう／行ってください」などの発話が続く

はずだが、田中はなぜその反応を待たずに「ほかの教室も行って見えます」と言っているのか。あるいは、なぜ自分から進んで「私が閉めてきます」と言わないのか。

- 4) 山中（山川の誤植か）が「私も行きましょう」と発言したあとで教室のカレンダーに言及するのはなぜか。特に、意図のないものだとしても、「きれいですね」と同意を求めているようなこの発言に、田中が何の反応もしないのはなぜか。
- 7) 田中の「雨の日の車道」についての言及、特に「自転車は安全な歩道を走ってください」というのは、だれのための交通安全指導か。（以下省略）
- 9) 劉は「かさがないからもうすこし待ってみます」と言っているが、「そろそろ午後の授業が始まる時間なのに、なぜ教室を出ないのか。また、この劉の発言を聞いて山川も田中も劉たちに下校を促さないのはなぜなのか。

下線部分を見て分かることは、これらの会話部分には、(1)相手の問いかけや発言に反応しない(2・4・9) (2)相手の反応を待たない(3) (3)発言を向ける相手が不明(7)などのパターンがあり、いずれも共同行為である会話の成立条件を破っていると判断される。

以上をまとめてみると、この教科書本文会話は、高木(近刊)に規定された会話の成立条件を、「ある動機(意図)を持った」というところと「相互行為(やりとり)に参加する」というところに2点で満たしていないということが分かり、そもそも会話として成立しないのである。では、実際の会話としては存在しないかもしれないが、日本語教育の教材としてなら、利用できるのであろうか。その点について、次節で検討する。

#### 4. 「文型教育」と会話教材

前節でみたように、本論で分析対象にしている教科書本文会話は、「会話」としての成立条件を満たしていないものである。それでも、第2課で見たように、学習項目としての文型・文法・語彙は、すべて会話のどこかに入れられている。このことをもって、当該の本文会話が、文型・文法教科書として優れた教材になりうるかどうかを以下に検討する。ただし、当該会話に含まれる文法項目はたいへん多いので、ここでは重点学習項目の一つである「補助動詞群」より～テシマウをとり扱うこととする。

森田(1989)によると、～テシマウは「文脈によって種々の意味を帯びる」(前掲書:531)として、「動作性の動詞に付けば、“すっかり…し終わる”の終結の意味で、動作の終了・完了を表す。(中略)意志的な動詞に付く場合に動作終了の意味合いが強調される」(前掲書:531)という用法と「～てしまう」には、しばしば“してはならないことをする”“具合の悪い状態になる”の意味が付加される。これは、動作性動詞のほか、状態動詞や受身・使役を伴った形で現れる」(前掲

書：232) という用法が中心的に説明されている。他の文型辞典などでも、この二つの用法が中心的に扱われており、これが～テシマウの学習に必要な項目であることが分かる。

ところが、本論で分析している本文会話には、「自転車の人が転んでしまいました」という例しか載っていない。この文脈での「転ぶ」は、動作性動詞だが意志動詞ではないので、森田（1989）の解説によれば、「してはならないことをする」「具合の悪い状態になる」などの意味になるタイプの用法であり、この場合は「具合の悪い状態になる」のほうと言える。そうすると、～テシマウのもう一方の中心的な用法、すなわち動作性の意志的な動詞に付いて完全な終了を表す、「この本、もう読んじゃったから、貸してあげる」のような例が、この本文会話では学習できないままになってしまうことになる。もちろん、複数の用法を本文だけで示すことは難しい場合が多いので、本文に入っていない用法を練習に回す教科書も多い。当該教科書も p.137 の練習問題に～テシマウの練習がある（本論末（図 2）参照）が、練習の課題文に主語がないので、それぞれが上述の二つの用法のどちらになるのか学習者には判断できず、文型教育の任務が果たされていないことになる。つまり、問題の本文会話は、前節で見たとおり自然な会話として成り立っていないだけでなく、その不自然さをある程度補えるだけの優れた文型教材にもなっていないと（少なくとも～テシマウに関しては）言えるのである。

## 5. 学習項目の「文脈化」と「会話」

前節までで、問題の本文会話は自然な会話文としても成立せず、文型教育用の用例の例文としても不十分であることが判明した。では、この本文会話はどのようにすれば、自然で会話教育にも文型教育にも役立つものになるであろうか。本節では、その点について議論してみたい。

まず、本文会話を自然な会話文として作り上げたい場合は、第 3 節で見たように会話の成立条件を満たすよう内容の展開にすることが肝心である。成立条件の中でも特に重要なのが、会話のやりとりをする人物が「ある動機（意図）を持った」人々であるということであろう。この会話の場合、その「動機（意図）」を「教室の窓が閉まっているかどうかと午前の学生が下校したかどうかの確認作業を二人の教師が共同で行う」ということに設定して、あくまでもその意図を完遂させるための「相互行為」としての話の展開を書いていけば、会話として自然なものができていくであろう。その一例は、すでに第 3 節で筆者が会話案として示したとおりである。

このような会話を作っていくときに必要なことは、「会話の精緻化」である。「精緻化」というのは、会話を書くときできるだけ自然な展開を考え、一つ一つの段階を省略せずに書き出していくということである。例えば、第 3 節の筆者の会話例で見ると、登場人物の「山川」の発話が「田中先生、ちょっといいですか」で始まっているのは、この発話があとで共同作業を提案するためにきっかけになる部分であり、昼休みと見られる学校の時間帯に同僚の教師を促して教室の見回りを呼び

かけるなら、最初に今話してもいいかどうか確認するのが当然だからである。このような展開となれば、相手がきちんと返事をし、それを確認してから次の発話を行うのも自然なことである。「山川」が「さっきから急に雨が…」と事情説明に入る前に「田中」の「あ、はい」という反応を待っているのはそのためであり、「田中」の応答がわずか 2 語の短いものだとしてもこれを省略して話を進めてしまうわけにはいかないのである。

一方、教科書の本文会話というのは学習項目の文型・文法・語彙の用例を文脈の中で見せるためのものでもあり、ドラマの会話のように展開に緊迫感のあればいいというものではない。そこで、会話の中に学習する文法や語彙の項目を会話にちりばめていくわけだが、ここでも会話が特定の「意図」の発言として自然な流れになっているのを妨げず、むしろその文脈にぴったり収まるように文法項目や単語を当てはめていかなければならない。このような作業を適切に行うには、会話に挿入する文型や文法・語彙項目が文脈のなかでどのような働きを期待されているかを確認しておき、そうした文脈の要請に逆らわない形で適当なことばをあてはめていくべきなのである。問題の本文会話が不自然な印象を与えることの理由の一部は、この教科書の筆者が補助動詞文型の導入のみに意識が行ってしまった結果、例えば、～テアルの例とし「書いてある」を、また～テシマウの例として「転んでしまう」を入れるために、下校すべきはずの学生が閉めるべきはずの窓を開けたまま戸外を眺め、交通標識や転倒事故の描写をするという話ができあがってしまったからなのである。

会話の流れの中に自然な収め方で文型や文法・語彙項目を入れるためには、当該の文型・文法・語彙などを「文脈化」する必要がある。筆者は、川口 (2004a・2004b) およびそれに先行する関連論文において、日本語教育の最終的な目標を「表現のための教育」にあると考え、文法教育と表現指導との間を「文脈化」という概念を使って有機的に結びつける教授法の試みを紹介している。詳しくは、前掲の拙論をご参照いただきたいが、「文脈化」とは、ある文型・文法項目・語彙などの言語形式が「だれが／だれに向かって／何のために」使われるのかを記述していくことで、文法教育と表現指導の融合が初めて可能になるということを説いたものである。この考えを、本論の本文会話の改善に利用して、～テシマウの文型を自然な形で本文会話に入れる試みをしてみよう。まず、第 4 節で森田 (1989) やグループ・ジャマシイ (1998) で検討した意味記述にしたがって、～テシマウの中心的な二つ用法をまとめ直してみると、次のようになる。

- 1) ～テシマウの用法(1)：個人の意図でコントロールできる行為の完全な完了
- 2) ～テシマウの用法(2)：個人の意図でコントロールできない事象の完全な実現

～テシマウの用法(1)は、「だれが／だれに向かって／何のために」表現する場合に使われるのだろうか。つまり、「話し手の意図でコントロールできる行為の完全な完了」を明言しなければいけないのは、あるいはそうしたほうがいいのは何のためであろうか。そのような内容の発話は、その「個人」が話し手自信である場合、「その行為を完全に終わらせることへの意思表示」になるであ

ろう。そのような言明が必要なのは、話題になっていることからの終了を望んでいる人に対して「それは必ず終わる」ということでその人物を安心させたり、納得させたりすることが求められている場合であろう。したがって、～テシマウ(1)についての「文脈化」の一つは次のようになる。

だれが：話題の行為が話題の人物の意図によって完全に終了させられること信ずる人が  
だれに向かって：その行為が完全に終了させられることを望む人に向かって  
何のために：相手の望むようになるので安心するように伝えたいため

このような「文脈化」を問題の本文会話に当てはめてみると、例えば「教室に残っている午前クラスの学生が／学生に下校するように促している教師に向かって／今している勉強をすぐに完結して下校することを知らせ、教師を安心させるために」学生が発言することが求められているような箇所が会話中があれば、そこで～テシマウが使えることになる。具体的には筆者が提案した第3節の会話に続けて、次のような学生の発言を会話に入れることで、～テシマウの文型の用例を挿入することができるのである。

山川：そうですね。じゃ、2階の窓と学生のチェックをお願いします。私は、3階を見てきます。  
(3階の教室に行く) ああ、劉さん、王さん、まだ勉強しているんですか。午後の授業が始まりま  
すから、早く帰ってください。

劉：あ、山川先生。すみません、この宿題の問題、すぐやっつけてしまいますから、それまでちょっと待ってください。

続いて～テシマウの用法(2)の「文脈化」はどうか。「個人の意図でコントロールできない事象の完全な実現」を表明するということは、「起きてしまった事態への関わりの無力さ」の表明であり、したがって「遺憾に思う」「具合の悪い事態を知らせて、対処を促す」等の表現が文脈で求められている場合に、この～テシマウが登場する。そこで、～テシマウ(2)の「文脈化」の一つを次のようにしてみた。

だれが：ある事態が自分のコントロールできないところで起きたことを確認した人が  
だれに向かって：その事態が好ましくないことだと思うであろう人に向かって  
何のために：そのようになったことは遺憾であると伝えたいため

これを本論の本文会話の状況に当てはめてみると、「山川」の提案で2階の教室の窓の開閉状態を調べに行った「田中」が、見回りを終わって戻ってきたときに、「205と208の窓が大きく開いて

いて、窓際の机がぬれてしまいました」というような報告をするところで、～テシマウのこの用法の例を示すことができる。

すべての学習項目について、このように「文脈化」した用例を本文会話や練習問題に使用するのであれば、成立条件を満たして自然に展開しているものであるかぎり、その会話は、会話教育のモデルとしても、文型指導のための例文としても使用に耐えるものとなるのである。

## 6. まとめと今後の課題

以上、『日本語で学ぶ日本語 初級』の第 14 課の本文会話を対象として、高木(近刊)に言う「会話の成立条件」を満たさず、学習項目の「文脈化」を意識していない会話は、教科書の会話であるにもかかわらず、会話教育のモデルにも文型・文法・語彙教育の用例文の集まりとしても使用に耐えないということを論証してきた。本論の分析対象は 1 冊の教科書であり、会話の不自然さも文型教育への配慮不足も少々極端な例ではあったが、一般に日本語教科書所載の「会話文」にこの教科書と同様の問題が見られることも少なくなく、本論で使用した高木・川口の分析の枠組は、教科書を作成する場合も使用する場合も、所載の会話文や練習問題などについての分析のための、汎用性のある枠組として利用できるものと思われる。

今後の課題は、さらに同じ枠組みで教科書の「会話」を分析してみることで、本論の分析の枠組みの妥当性を検証し、それに修正を施していくことであるが、それに関連してさらに二つの課題が生まれてくるであろう。一つは、会話教育の問題であり、文型・文法のための文脈を提供する以外に、本当の会話教育を行うための会話文モデルというようなものがありうるのか、あるとすればそれはどのようなもので、どのような手順でそれと指定することができるかということである。この問題については、高木(2003a・2003b)が談話分析と待遇コミュニケーション理論から興味深い議論を展開しているので、その日本語教育への応用を試みてみたい。

もう一つは、文型・文法教育関連の課題で、文型・文法教育のための用例は会話の形でしか示すことはできないのか、ということである。これについては、筆者自身が川口(2004a・2004b)で述べたように、「利益実現」を目的とし、口頭表現向きで「会話」として提示し、練習させやすい「働きかける表現」と、「自己開示」「他者理解」の表現として文章表現向きの「語る表現」を意識的に区別して教えることで、学習項目を何でも会話文の中に挿入しようとして会話の文脈と文型の「文脈化」の間に矛盾が生じることを防げるものと思われる。そこで、初級文型や文法項目のどのようなものが「働きかける表現」と「語る表現」のそれぞれに適するのかが一つずつ調べていき、「働きかける」表現はどのような会話にいれるのが適当かを検討していく必要がある。このようにして検討していった、適切な文型・文法を含む会話文が高木諸論文の会話成立条件を満たすような

ものであれば、文型・文法教育と会話教育はともに「自然な会話」をモデルとして矛盾なく共存することができるのである。

## 参考文献

- 蒲谷宏／川口義一／坂本恵(1998)『敬語表現』大修館書店
- 川口義一(2004a)「学習者のための表現文法―「文脈化」による「働きかける表現」と「語る表現」の教育―」  
『AJALT』第27号
- 川口義一(2004b)「表現教育と文法指導の融合―「働きかける表現」と「語る表現」から見た初級文法―」  
『ジャーナル CAJLE』第6号 カナダ日本語教育振興会
- 川口義一(近刊)「中級会話練習の落とし穴―談話記述の精緻化に向けて―」『ヨーロッパ日本語教育』第27号
- グループ・ジャマシイ編著(1998)『教師と学生のための 日本語文型辞典』くろしお出版
- 清ルミ(2004)「コミュニケーション能力育成の視座から見た日本語教科書文例と教師の“刷り込み”考―「ないでください」を例として―」『異文化コミュニケーション研究』15号 神田外国語大学異文化コミュニケーション研究所
- 高木美嘉(2003a)「会話における待遇の方法―依頼者はどうやって意図を実現しようとするのか―」『早稲田日本語研究』第11号 早稲田大学日本語学
- 高木美嘉(2003b)「会話における被依頼者の「調整」の方法」『国語学 研究と資料』第26号 早稲田大学国語学研究と資料の会
- 高木美嘉(近刊)「「会話」という待遇コミュニケーションの仕組み―会話教育の基礎理論の考察―」『待遇コミュニケーション研究』第1号 早稲田大学待遇コミュニケーション研究会
- 森田良行(1989)『基礎日本語辞典』角川書店